

術中蛍光撮影

新たな顕微鏡の技術として、手術中にインドシアニングリーン（ICG）を静脈内に投与し、特殊なフィルターを用いて観察すれば、血液が流れている部分だけを抽出する撮影法が開発され、当科でも 2011 年に導入しました。ICG は肝機能の検査に用いられる安全な試薬です。脳動脈瘤の手術の際、クリッピングが完全であるかどうか、周囲の血管を閉塞していないかなどのチェックを術中に確認することができます。また、脳動静脈奇形の摘出や脳血管吻合術にも応用しています。

図 1：脳動脈瘤が出現したところの術中写真。

図 2：1本のチタンクリップで遮断したところの術中写真。動脈瘤頸部に動脈硬化あり、黄色く見える。

図 3：3本のクリップで動脈瘤が遮断できたところの術中写真。

図 4：クリップ前の蛍光撮影。

図 5：1本のチタンクリップで遮断したところの蛍光撮影。動脈瘤内への血流が遮断できていない。

図 6：クリップの追加で動脈瘤内への血流が遮断され、親血管の開存もできていることを確認した。

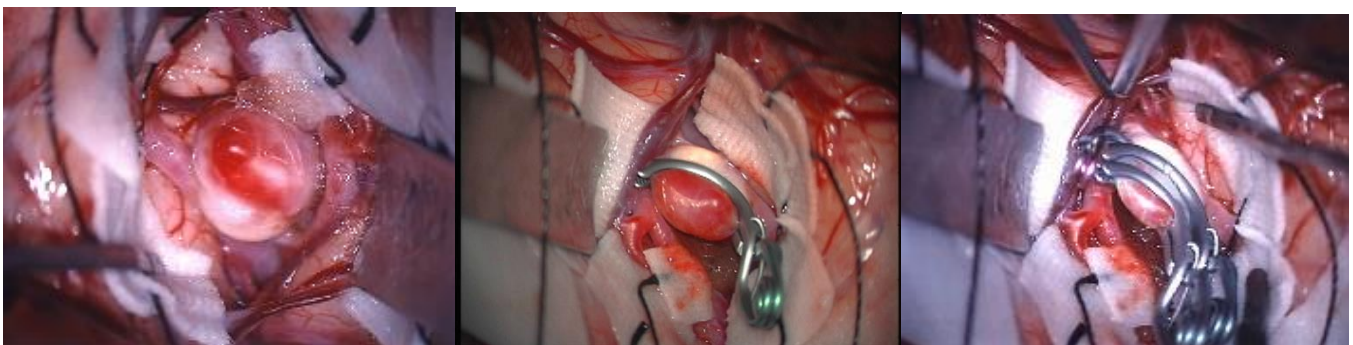


図 1

図 2

図 3

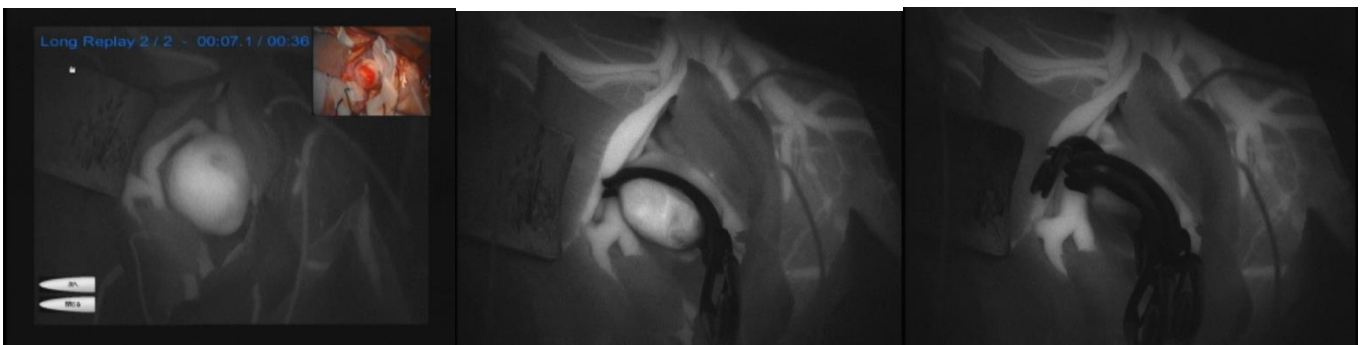


図 4

図 5

図 6

治療実績

2014年に行った脳動脈瘤手術（クリッピング）は破裂（くも膜下出血）20例、未破裂22例で合計42例でした。

（同期間に動脈瘤に対してコイル塞栓術を行ったのは破裂12例、未破裂14例の合計26例でした。

当院での平成7年からの未破裂脳動脈瘤の治療成績は死亡率0%、後遺症率2.3%でした。

2014年に行った脳腫瘍の手術は良性・悪性含めて合計25例でした。当院では転移性脳腫瘍に対してはラジオサージャリーを行っています。